

# 現行『教行信証』テキストの諸問題

研究補助員 田村健一

## 目次

- 一、現行『定本親鸞聖人全集』の環境
- 二、坂東本テキストの意味
- 三、当研究班の成果と展望

(略号)

『定親全』Ⅱ 『定本親鸞聖人全集』(法蔵館)  
『真聖全』Ⅱ 『真宗聖教全書』(大八木興文堂)

## 一、現行『定本親鸞聖人全集』の環境

親鸞聖人七百回御遠忌(昭和三十六年)に向けて、『定本親鸞聖人全集』出版が企画され、長い年月をかけて十八冊の形で出版された。<sup>(1)</sup>後に事情によって版權が移り、二冊づつ合冊し、現行の九巻本(付録一冊別)となつて法蔵館より刊行された。どちらも親鸞聖人全集刊行会の名で出版されたが、大谷大学・龍谷大学・高田派関係の研究者の全面的協力によつて成つたものである。現行の九巻本は、もともと分冊であつたものを、外装面でのみ合冊にしただけに、不便な体裁というそしりはまぬがれない。例えば、通し頁でないために後半が別途の頁付けになっている。初学者は必ずといつていいほど面くらうであろう。索引にしても分冊当時のままに別々であり、

巻末に合わせて並べてある意味が薄い。

付随した個別な欠点として「第一巻・教行信証」を例にとつてみよう。原型は二分冊であり、各巻別々の凡例があったものを合冊にした際に、後篇の凡例のみを活用した。その凡例の第一に「本書はその後二巻を収めた」とある。もちろん「後二巻」とは真仏土・化身土の二巻を指すが、合冊にした以上「本書は全六巻を収めた」とすべきものであろう。定本の最初に置かれた凡例の、その一行目から不都合が生じているわけである。

合冊に対応した整理が全くなされていないところには問題があった。ただし、同類を合冊にし、十八冊という多くて使いづらい分冊の活用の便（特に整理面）を工夫した事と、月報を別冊付録としてまとめたことよつて、学問水準としては極めて高度で貴重なものでありながら、はさみ込みの小冊子であるがゆえに紛失しやすい難点があった月報の保存に関し、いささか改善がみられる。合冊にしたことで総合的には益と不利益が生じたといわねばならない。問題は、活字の訂正などが、ほとんど当時の事情において不可能であったことにある。

現行九冊本の『定親全』全体の長所・短所を述べる任には無く、またその能力も無いので、今はわれわれ研究班が関わった第一巻についてのみ、作業の中で気づいた問題点を中心に言及して行くこと

とする。

今日『定本教行信証』（法蔵館）という一冊本が、テキストとして大学内外で活用されてきている。周知のように、従来の『定親全』第一巻を大版にし、多少の修正を加えて出版したものである。その編集方針は、あとがきに、主校訂者・細川行信大谷大学教授（当時）が述べているとおり「原版で改訂の可能な限り修正を施した」ものであつて、本文の活字は従来のをいじらぬまま、脚注や返点・右訓・左訓等の細字部分の修正にとどまっている。これは出版サイド（法蔵館）との話し合いによつてなされたものであるが、脚注を見ると、あきらかに訂正箇所活字体が異なつていて、本としては新旧の混雑した折衷形態を取っている。本文の字体や行がえ（段落）の修正は全く行なわれなかつたため、その面での誤まりはそのまま踏襲する結果になつている。<sup>10)</sup>

この『定本教行信証』の実質上の編集作業は、当時の細川教授を中心に真宗総合研究所の教行信証研究班が所長の許可を得て関連事業として行なつたものであり、従つてその責任の一端は、当研究班に在るのであるが、結果としては改行等の変更が禁ぜられる制約下に行なわれたために、頁付けは従来の『定親全』第一巻と全く同じである。つまり、今日学会で広く通用している『定親全』の頁表記が、全くそっくりそのままに『定本教行信証』に依用しうるので

ある。この利便は、少々の誤記修正を犠牲にしても失いがたき長所には違いない。共通のテキストとして市民権を得るためには、信頼できる正確さと依用の拡がり・定着を生む時間が必要である。『定親全』が世に出て、すでに三十年になる。その定着は無視しえない実情にあることを思うのは私だけではあるまい。

## 二、坂東テキストの意味

今日、西本願寺系の教学研究・真宗学のテキストとしては『真宗聖教全書』が広く活用されている。その巻一「三経七祖部」は東西両派で共通使用されているが、それに比して巻二「宗祖部」に関しては東西で評価が異なる。西本願寺系では、もっぱら『真聖全』巻二を用いて、ほぼ同文献を収める『定親全』第一～四巻に依拠することは必ずしも多くはない。宗祖真筆の左訓等にこだわるならば『定親全』は必見の書ではあるが、お互いの伝統の違いゆえか、聖典としての利用しやすさや索引等の周辺整備が整っているゆえか、西本願寺系あるいは一般において『定親全』の活用は、一部の専門家に限られてきたように思われてならない。こと『教行信証』に関して、東西それぞれに依用テキストが違うことは江戸時代からの悪しき伝統であつて、その統一はむづかしい現状にあるように思われる。

当研究班が初期において考案したのは、そのような情況をも鑑みて、『教行信証』の章節の共通表示をも目ざした統一テキストづくりであつた。しかし、内外の情況を虚心坦懐に静観するならば、共通テキストの必要性として互いに歩み寄る姿勢が、広く東西の識者に浸透していない現状において、その克服を一朝一夕に成すことは極めて至難なことである。大いなる理想に向けた、最初の一步としての価値はあるが、その悲願成就はいつのことになるのか、予想もしえない遠大な理想に感ぜられる。しかし、そのような研究、あるいはその前段階ともなりうる基礎研究が、学問としてなされねばならない重要課題であるの言うまでもない。そのジレンマの中で、当「教行信証研究班」は研究を続けて来たわけである。

もう一つ忘れてならない事がある。それは『教行信証』研究にとつての「坂東本」の位置づけについてである。「坂東本」<sup>3)</sup>は、今日学界において親鸞真筆と認められる『教行信証』唯一の現存本である。そして、草稿本として親鸞の思索のあとをたどることも可能な、優れて原型を探りうる貴重な聖教である。「坂東本」は江戸期から大谷派本願寺にあつて、学界講師職にある特権者しか閲覧は許されなかつたが、今日では写真版などで容易に内容を知りうる恵まれた環境にある。大正末期には、東本願寺からコロタイプ版が発刊された。残念なことに浅草別院の火災後で、「総序」「教巻」の焼けた箇所は

失われたが、学界に公開された意義は極めて大きい。また大正十五年には大谷派侍董寮編『真実教行證文類』が発刊されたが、「坂東本」を底本に、異本との校異も行なった活字化の良書である。それら先驅書に続き、今日では『親鸞聖人真蹟集成』（法藏館<sup>4)</sup>の第一・二卷（坂東本）が普及して大変に便利であり、『定親全』や『真聖全』の刊行から時間も経って、「坂東本」を底本・対校本として活用する手法は、それなりに定着してきているように思われる。

「原型」としての「坂東本」の重要さは比類なきものであるが、テキストとしての整備された形としては、西本願寺本・高田専修寺本の意義は極めて大きいと言わねばならない。また、「坂東本」は冒頭部分が消失していて欠点もある。これらを総合的に考えて、「坂東本」をテキストの底本とするには、微妙な問題が生じていることが感ぜられる。単に真蹟であるとか国宝本であるとか、大谷派に伝統する法宝物である等の事情のみをもって底本としてよいかどうかは速断しえないのである。しかし、先に述べたとおり「坂東本」が研究上で最重視されるべきであるのは間違いがなく、あくまでも普及版のテキストの底本として万能ではない、ということである。

### 三、当研究班の成果と展望

『定本教行信証』が、今日最も入手しやすい「坂東本」に忠実なテキストであると思われるが、もしも「坂東本」そのものに、より大きな原初的意義を感じてテキストを考案するならば、当『研究所紀要』第四号の「別冊2」として刊行された「化身土巻」末の校異本（別冊2・十一～百十頁）の方が、より原型に近いであろう。なぜならば、後者は行がえ・字体・圈発（音声表記）にまで忠実であり、西本願寺本・高田専修寺本との校異に省略を行っていないからである。<sup>6)</sup>

この視点に立って、当研究班は「別冊2」の手法を踏襲しながら、他巻の校異ノットを作成してきた。しかし残念ながら、長期にわたる作業の継続において作業が進められてきたものの、成果・完成度は十分ではない。年度ごとの方針や担当者の異動・変容によって、一部一貫性のないものになっていることは否定しえない。しかし、足かけ六年間の研究作業によって『教行信証』六巻全体の研究は一定の成果を残してきている。

既に『紀要』や『所報』にて研究成果の一部が示されているが、それぞれ分業して行なった作業を総合し、形として成果を結実させ

る最終目標は、将来的に新テキストを出版することが第一に考えられてきていた。しかし内外に新テキストを必要とする気運が盛り上がり、従来、『定親全』第一巻や『定本教行信証』への不足言が、今一つ総合的に指摘されない実情下にあつて、作業展望は二転三転する昏迷をきわめてきた。その一因として、従来テキストに不足があつても、『真蹟集成』等の活用によつて不足を補うことが今日では意外に簡単に行なえるからであろうか。

しかし、『定本教行信証』の問題点が指摘されねば、次なるテキストは生まれて来ない。そこで、私見ながら『定本教行信証』の編集方針と、その問題点を、凡例の順に整理しながら考えてみたいと思う。

- ① 凡例一において、国宝真蹟本の原型に忠実であることが言われるが、活字組みの段階で何らかの操作が加わるのはやむをえない。一行字数や一頁の行数は、原典のままに再現する必要は、学習用テキストに関しては重要ではない。ただし、「坂東本」の写真版に対応する解説書・解読の手引きとしてならば、字体・行がえ・改頁・声点・その他の書き加えた内容等に配慮すべきであろう。
- ② 凡例二で、校異の方針が示されているが、対校本による脚注の取捨選択に関しては担当者の主観的判断に負うところが大きく、結果的には重要度があまり感ぜられない注記が、省略されたり採

用されたり不統一が見られる。脚注は大切なものに限定されることはやむをえない一面を有するが、何が重要で何が不要かについては、より慎重な対応が必要とされるであろう。

- ③ 凡例三で、『六要鈔会本』の分段に従つたとするが、その方針自体が今日的に適切かどうか考察すべきである。当研究班では東西の講録によつて科文表を収集し『紀要』第四号別冊一にて既に発表してあるが、その吟味は今後の課題として残されている。また『六要鈔会本』に対応していない分段が混在している事實は、註(2)で述べた。

- ④ 凡例四で、活字組みの方針が示されているが、旧字体にすべき必然性は今日的ではない。親鸞の字体をも考慮に入れた活字選択が、何らかの方針をもつて行なわれても良いと思われる。親鸞の字形は、同じ字でも異体字やくずし字が存在し、同じ頁の中でも必ずしも統一されているとは限らない。困難な問題が伴うが、旧字体に比べれば現在の当用漢字に近い場合もあり、結論としては新旧混在の活字形の文となつてもかまわないと考える。また、欠画文字の問題についても、貴人に対する敬意を示す意味が慣習としてあつた以上、何らかの注記は必要ではなからうか。<sup>7)</sup>
- ⑤ 学習用テキストとしては、下欄・横脇などに章節名・分科が示された方が便利である。また『定親全』にあつた索引と解説が新

訂後は割愛された。索引は学習の手引きとなるので、何らかの改善が望まれる。

⑥ 頁付けは、既に『真蹟集成』にも付記され、数多くの論文に対応しているので変更は容易ではないと思われるが、将来的には新規更新されていくべきであろうと思う。

⑦ テキストに所収しなくてもよいが、左訓集・右訓集として索引表が整備されるのが望ましい。また親鸞の用字が、「字典」として書誌学的に研究され、成果が公開される大切さを思う。既に重見一行氏等の画期的な研究があるが、テキスト作成に際して書誌学成果の活用は重要ではなからうか。テキストに付随する研究の重要さは改めて言うまでもないであろうが、専門的になりがちな研究成果を、平易な形で活用しうる工夫がテキスト作成などの場合は考慮すべきであろう。

以上、私見ながら『定本教行信証』の諸問題を改善する視点を並べあげてみた。現行のテキストに、何が不足であるかを考え、書誌学研究にも利する高水準の編集を考えてみたのである。

しかし、テキストは「坂東本」の解説書（影印本の解説書）として成立させるべきものではない。その方面での良書が求められるのとは別に、学習用のテキストとして正確で便利な書籍が必要とされているのである。つまり学習用に意図されたテキストと、高度な学際

的要求にかなうテキストとは違うのであり、必ずしも目的は一致しない。学習用の利益をより尊重すれば、平易な表現（活字の選び、句読点の利用など）に手を加えなければならず、書誌的な原初形態は制限が加わるだろう。逆に研究者の高度な専門的要求に応えようとするならば、テキストとしては詳細すぎて初学者には不必要な表記が多すぎる結果になるであろう。対象とするテキスト利用者層の見きわめが問題となってくる。

問題解決の方向性の一つとしては、目的別にテキストを作り、より効率のよい文献活用を促進させる方法を選ぶことである。既に西本願寺の『浄土真宗聖典』で「原典版」と「註釈版」に使い分けられている先例があるが、漢文テキストとして『教行信証』を新たに作り直す場合でも、必要ならば作り分け・使いわけを行なうことは、十分に可能であろう。

当研究班は、真宗総合研究所内の研究事業として、前後六年間、三十余名の協力者と六百余万円の経費を必要としてきた。残された数十個のダンボールに収められた諸論文コピーや研究ノートの山を前にして、研究作業の後半に関わった一人としては今後の資料活用には大なる期待と不安を抱いている。新規テキストを作成するためには、未だ不十分な完成度であるだけに、将来的展望としては、更なる創意工夫による基礎研究の充実を求めてやまない。いずれ必ず

起こるであろう新たな土音つちごを信じてやまない私としては、より正確で、より便利なテキストが、二十一世紀には制作され活用されていることを夢みてやまない。

註

- (1) 苦勞話は枚挙にいとまがならず、見聞によれば、篤信の在家者・真田氏の尽力は特記すべき実情であったという。(真田氏の父君は真宗大系編纂時に尽力され、父子二代にわたる陰の功勞者と言えよう。) 当時、七祖聖教全般にわたる原稿が用意されたが、編集上で活用が断念された経緯がある。
- (2) 凡例によると、分段は『六要鈔会本』に依るというが、例えば三八一頁六行目の「然愚禿釈鸞建仁辛酉曆……」は、行がえすべき箇所である。意味上から、前段と区別すべき教学上の大切な箇所であるにもかかわらず、修正がなされていない。このような例は随所にあると思われる。
- (3) 現在、京都国立博物館に所蔵される。近年、東京国立博物館での「日本国宝展」に出品されたが、普段は公開されていない。
- (4) 親鸞聖人生誕八百年記念出版。昭和四九年刊行。  
これに先立って宗祖聖人七百年御遠忌記念出版として『国宝 顕浄土真実教行証文類影印本』が大谷派宗務所から刊行されている。
- (5) 『定親全』第一巻は、「坂東本」を底本に西本願寺・高田本を対校し、『真聖全』第二巻の『教行信証』は、西本願寺本を底本に「坂東本」等を対校している。先駆として中井玄道氏の遺業も大きい。
- (6) 『定親全』第一巻に関する限りは、校異の記載に省略が見られる。
- (7) 田村悦子「親鸞の特に坂東本 教行信証の筆蹟について」(『美術研究』

318・320)において、親鸞の欠画文字はハイカラ趣味(当時の南宋様式に従わず、それ以前の北宋様式によっている)である、とする見地が示されたが、事例として上皇・天皇に対して欠画文字が用いられていることなど、多角的な見方ができるであろう。欠画文字の用い方の研究と合わせて、今後何らかの進展が望まれる分野である。